

## 平成 28 年度 第 3 回「防災スペシャリスト養成」企画検討会

## 議事概要

## 1. 検討会の概要

日 時：平成 28 年 8 月 5 日（金）10:00～12:00

場 所：中央合同庁舎 8 号館 5 階 共用 A 会議室

出席者：林座長、岩田委員、牛山委員、宇田川委員、大原委員、鍵屋委員、国崎委員、

田村委員、中林委員、丸谷委員、渡邊委員

加藤政策統括官、安邊参事官、重高企画官、山田参事官補佐、田口政策調査員

## 2. 議事概要

議題ごとに各委員による意見交換を行った。主な意見等は次のとおり。

## (1) 研修内容の見直し 有明の丘研修(第 1 期)

## ■「⑩総合防災」コースについて

(コーディネーター意見)

- ⑩総合防災は、意思決定ができる人材(首長等のトップ)を養成することを目的とした。
- 1 日目は災害予防対策の考え方や課題、対策(解決策)について体系的に理解し、2 日目は災害応急活動の様々な分野の活動や課題について理解し、かつ災害対策本部運営の具体的な展開について習得できるような単元構成とした。

(意見)

- 有明の丘研修で不足している予防対策の分野を補完する内容であり、たいへんよい。
- トップとして、予防対策から復興までを視野に入れた中で計画立案や資源配分を適切に実施できるよう、1 日目 1 限目の「総合防災総論」で、予防から復興までの業務全体の流れを理解できるようにするとよい。
- 予防対策の政策については、国土交通省地方整備局長の OB のように、政策全体を見る立場を経験した人に講義していただくとよい。
- 1 日目 5 限目の「防災政策演習」で学ぶ常任委員会模擬答弁の作成は、自治体の幹部職員が実際に苦勞する業務であり、たいへん有効である。
- 2 日目 1 限目で災害対応業務全体の流れを理解してもらったうえで、具体的な応急対策業務について学べるように構成するとよい。
- 2 日目 1 限目の「組織外の応急活動政策」では、ボランティアのような民間の支援についても学べるとよい。また、広域応援については、国・都道府県との関係と自治体間連携に分けて理解できるようにするよい。

- 災害時に企業やボランティアなどの民間との連携を円滑に行うには、事前に協定締結や自主防災組織との連携などの対策の重要であることを学べるとよい。

#### ■「⑦指揮統制」コースについて

(コーディネーター意見)

- ⑦指揮統制は、指揮者にあたる職員の業務を中心に学ぶことを目的とした。
- 受講対象者としては、危機管理監等の下にいる課長レベル(実務者のトップ、もしくはその補佐)を考えている。
- 指揮者の業務には、全体を指揮すること、職場の労働安全管理的な役割をすること、他の関係機関との間の連携調整をすること、広報を担うこと、という4つの役割があることを基本として、それらを学べる単元構成としている。

(意見)

- 2日目3・4限目の「指揮統制の現状(演習)」は、危機管理監等だけでなく、部長レベルの職員なども意識した演習にするとよいのではないか。
- 2日目2限目の「リーダーシップ」では、全庁的な動員体制など人材・人員管理についても学べるとよい。
- 内部の指揮統制も重要だが、外部組織との連携・調整についても、学習目標にあげてしっかりと教えるべき。
- 本コースの狙いがしっかりと伝わるよう、パンフレットのコース説明は、「効果的な災害対策本部のあり方について学べる」といった内容に改善するとよい。

#### ■「⑧対策立案」コースについて

(コーディネーター意見)

- ⑧対策立案は、災害対策本部の活動の具体を学ぶことを目的とした。
- Planning Pのような活動のサイクルの考え方を導入して、活動サイクルの各段階の業務と、それら業務の進め方や方法について理解してもらう単元構成とした。

(意見)

- 「対策立案」というコース名から、平時の地域防災計画づくりについて学ぶコースだと誤解されないよう、パンフレットに記載するコースの説明文を工夫すること。
- 「対策立案」を適切に実施できるようになるには、災害対策本部事務局の職員だけでなく各部局の災害対策メンバーにも対象者を広げる必要がある。その意図が伝わるようパンフレットの記載方法を工夫するとよい。

#### ■「⑥復旧復興」コースについて

(コーディネーター意見)

- ⑩復旧復興コースは、基盤復興、生活復興、社会復興、産業復興の4要素に係る業務について適切に理解できるよう、かつ復興が総合的な地域づくりにつながっていくことを理解できるように講義内容を見直した。

### (意見)

- 雇用の確保は社会基盤の復旧とともに自治体にとって重要な業務であることから、2日目3限目の「地域産業の復興と雇用確保(産業復興)」を社会基盤の復旧に係る単元のある1日目に移動してはどうか。
- 演習が少ないが、ワークショップ形式にこだわることなく、単純な討論や発表など短期間・短時間であっても受講者が能動的に学べるように工夫するとよい。
- 1日に1単元程度は、受講者同士が検討しあうような「場」を意識的に設定するようにするとよい。
- 東日本大震災の被災地で問題になっている高齢者福祉との連携の重要性についても学べるようにしたい。
- 実務担当者だけでなく政策企画レベルの職員も受講対象者となるように、パンフレットのコースの説明を工夫するとよい。

### (2)テスト作成の考え方、作成方法等について

- 難易度のある程度想定した上でテストを作成する必要がある。
- 難易度に明確な基準があるわけではないが、確認テストであれば8割以上の人が正解するレベルを基準としていることが多い。
- 難易度のレベルを安定させるには、問題数を増やし、正解率が安定するよう問題を取捨選択していく取組が必要。
- 「○×式」問題は、誤り(×)の問題を作成するのが難しく、また、「○×式」だけでテストするには限界がある。「択一式」などの形式を取り入れるなど、テストの方法についても今後検討していく必要がある。
- 民間の講師にテスト作成を求めるのは難しいと思われる。コーディネーターと事務局が相談して作成する必要がある。
- 「基本概念(知識)」はすべての項目について記述できるだろうが、「基本用語」はすべての項目について記述できるわけではない。「基本概念(態度)」と「応用(技能)」を記述するのはかなり難しい。学習者が身につけるべき内容の具体化は、時間をかけた議論が必要。
- テスト問題を作成するためのマニュアルの準備が必要。誰もが問題を作れるよう、作成方法はなるべく単純化するとよい。
- 法律や計画との整合が図られるよう、内閣府がテスト内容をチェックする必要がある。
- 有明の丘研修に来なくても、個人が能力を身につけられるようにするには、長い時間をかけてでもテストバッテリーを充実させることが重要。
- 将来的には、テストを作成するための委員会的なものを設置し、そこでテストを作成していくのがよい。

### (3)その他

- 現在の防災スペシャリスト養成研修のホームページは、写真や受講者の声などを反映させるなどして、内容の充実を図るとよい。